

未来眼やまがた 第12回

チャレンジすることはエキサイティングで面白い

いじめや不登校、そして学力低下など、子供たちの教育を取り巻く課題が山積している。このような課題の解決にどのように取り組んでいくべきか、またアメリカと日本の教育やコミュニケーションの違いなどについて、山形県教育委員会委員長であり、免疫学者の石坂公成氏にうかがった。

■ 社会教育・人間教育も学校で

町田 現在、日本において教育が大きな問題になっていますね。家庭教育・学校教育・社会教育の3つがそろわなければ本当の教育はできないのではないかと考えておりますが、現状をどうみておられますか。

石坂 現在の日本の教育は、学力がどうのというより社会人として、人間として根本的な教育ができていないところに最

大の問題があると思います。これには家庭での教育が少なくなった、また不均一になったことが背景にあるのではないかと思います。

町田 山形県は三世帯同居率が全国1位と恵まれています。年々比率は減少し、核家族が増えています。核家族化で、両親は仕事も家庭のことも忙しく、子供の家庭教育にまでなかなか手が回らなくなっています。

石坂 きちんとした家庭教育が受けられない子供たちのために、何とかしなければなりません。家庭で出来なければ、学校でやるが必要になりますが、現場の先生は非常に忙しく余裕がありません。しかも、政府がそのような現場を変えようとしないうちに問題があると思います。

町田 先生のご指摘のように、家庭教育がなおざりになった分、学校教育へ負担が掛かっているのではないかと思います。

石坂 頭取が冒頭言われたように、家庭教育・学校教育・社会教育が一体とならなければいけないという原則はその通りですが、実際に今の家庭教育を1~2年で変えることは不可能です。ですから、少なくとも今は、学校教育のなかに子供たちの社会教育、人間教育の場をつくらなければ、短期間に問題を解決することは難しいでしょう。

町田 戦前は中央集権的教育行政でしたが、戦後はアメリカの考え方を取り入れて、地方分権としての教育委員会制度が導入されました。しかし、実際は文部科学省主導となっており、本来めざしたような地方分権的運営がされていないのではないのでしょうか。

石坂 最終的に実行するのは地方自治体ですから、地方自治体がしっかりしない限りは教育を立て直すことはできません。地方は国に対して、「あなたたちには権限はないのだ」と言えなければだめです。

■ 1対1の対話が必要

町田 核家族が増えているとともに、子供の数が少なくなっているのも、人間教育上マイナスになっていると思います。

石坂 最近の子供たちは親との接触が減ったうえに、兄弟姉妹も少なくなっているの、学校以外に人間的



●町田 睿 (まちだ・さとる)

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

な接触をする場所がなくなってしまいました。

かつてアメリカでも同じような問題を抱えていました。つまり、アメリカでは家庭教育をしっかりとやっている家庭と、全くかまわない家庭があり、きわめて不均一な状態でした。そこで、ある程度のことはみんな学校で教育することにしました。私の息子はアメリカの小学校に通っていましたが、アメリカの先生は大変だと思いました。アメリカがそうだったように、人格教育の問題に取り組むためには、あるレベルまでは学校で取り組まなければだめですね。

町田 ご指摘のとおりだと思います。例えば学校での徳育教育には、イギリスのパブリックスクールのような寄宿制度が有効だと思いますが。

石坂 そうだと思いますよ。山形県教育庁の人たちの話を聞くと、グループで先生と生徒の間の対話はあっても、個人的な対話はほとんどありません。先生と生徒の1対1の対話が必要です。

町田 また、小中高の教育だけでなく、大学での教育にも問題があるのではないのでしょうか。今は大学に合格することが目的になっています。そうではなく大学ではもっと学業を修めることを中心として、その目的が達成されたら卒業できるようにすべきだと思います。また、少なくとも大学の前半は人間教育ができるようなシステムを入れたらどうかと思います。

石坂 アメリカのカレッジは4年間の教養教育で、専門教育はしません。しかも、大半の学生は寮に入っていますから、4年間の寮生活と教養教育で人間が形成されていきます。しかし今の日本の大学はほとんどのところで教養学部を廃止してしまい、すぐ専門教育となります。教養教育は、すぐには役に立ちませんが、あるのとないのでは長い目で見ればずいぶん違うと思います。

■ お互いに理解しようとするアメリカ人

町田 先生のご経歴を拝見いたしますと、アメリカでの研究生生活が35年と長く、その間にデンバーやカリフォルニア、ボルティモアなどアメリカのさまざまな大学で研究されていますね。日本では学閥などが大きな力を持っているため、なかなかそうはいきません。アメリカのようにテーマ重視で研究者が自由に行き来できるのはすばらしいと思います。

石坂 アメリカでなぜそのようにできるのかといえば、「どの研究テーマにどれだけ国のお金を使うか」を最終的に学者が決めるからでしょう。たとえば、ガン研究の領域に全体として国がいくら研究費を使うかについては、政治家、つまり議会が決めます。そのなかで臨床研究か、基礎研究か大括りの配分を決めるのは官庁



●石坂 公成 (いしざか・きみしげ)

1925年東京都生まれ。48年東京大学医学部卒業。53年国立予防衛生研究所血清部免疫血清室長。62年渡米。63年小児喘息研究所(デンバー)免疫部長、66年に照子夫人との共同研究により発見したアレルギーの原因となる免疫グロブリンE (IgE) を発表。70年ジョンス・ホプキンス大学医学部内科学教授兼微生物学教授、また74年～京都大学医学部教授を兼任、81～89年ジョンス・ホプキンス大学免疫学部長、89年ラホイヤアレルギー免疫研究所を創設し、95年まで所長を務める。96年帰国。72年バサノ賞、74年文化勲章、99年勲一等瑞宝賞、2000年日本国際賞を受賞。2006年より山形県教育委員会委員長。

です。しかし、最終的にどの研究テーマに、いくら配分するかは学者が議論して決めます。そのようなシステムを採用していますので、いい研究をしており、学者の間での評価が高ければ、日本人だろうと中国人だろうと研究費が得られます。

しかし、日本では研究費の配分は最後の最後まで官僚が決めています。専門的領域に疎い官僚が、研究テーマを選ぶわけですから、ユニークな研究計画は選ばれません。これでは先ほど申し上げたようなアメリカのシステムには太刀打ちできません。

町田 日本では例えば学閥のように、個人よりもグループで仕事をする傾向が強いと思います。グループでの仕事は、一人ではできないことも力を併せて大きな成果につなげることもできますが、一方で、一人ひとりが自分の個性、自分の問題意識でチャレンジすることが弱くなるのではないのでしょうか。

またグループですと、問題が生じたときにその責任の所在がわからなくなってしまうという弱点もあります。問題が発生し、誰がそのような問題を起こしたのか、どこにその原因があるのかといった場合、お互いをかばい合い、問題の所在がわからなくなってしまうことがあります。

私は「正しい結論を導くために大いに議論しよう」と言うのですが、「議論することは好きではない」と議論することを避けられ、問題解決することが難しいことも少なくありません。

石坂 それはおそらく、日本人とアメリカ人の本質的

な違いから起こることではないかと思います。日本人の場合は、表面的に荒波を立てないようにしますが、アメリカ人の場合、思っていることを言い合うことは傷つけることにはなりません。傷つけられたとも思っていないし、傷つけたとも思っていない。

アメリカでは互いの意見は違うということが前提にあり、「なぜこの人は自分と違う意見をもっていて、どういう理由で言っているのだろうか」ということを議論によって、お互いに知ろうとします。

つまり、相手がなぜそのような意見を言うのか一生懸命、理解しようとしています。そして、どちらかに決まった時にはお互いそっぽを向きません。「じゃあ、そのように決まったのだから、自分のできることはやろう」となります。しかし、日本人は反対意見を言った人たちは協力しません。また協力してもらおうともしませんよね。そこが根本的に違うところだと思います。

町田 それは小さい頃からコミュニケーションに重点を置いて教育していることが影響しているのでしょうか。

石坂 日本人は単一民族ですが、アメリカにはあらゆる人種がいるわけです。宗教も違うし、考え方も違う。それだったら、思っていることを一生懸命伝えなくては、相手には伝わりません。アメリカでは、コミュニケーションがとても大事です。ですから、子供の時からトレーニングをしています。

日本の場合、そのようなトレーニングは必要なかったと思います。なぜなら日本人は黙って座っていても相手のことをわからなくてはいけなかったのですから。しかし、これだけ日本も国際化していますから、これからは考え方を変えないといけませんね。

■ 照子夫人とのエピソード

町田 先生は、山形市ご出身の照子夫人と学生時代に研究所で出会い、それから同じ研究者として道を歩まれました。そして、ご夫婦で研究活動に取り組んでこられた成果として、1966年にアレルギーの原因となる免疫グロブリンE (IgE) を発表されました。

石坂 彼女はアメリカでは子育てと家事をしながら、しばらくはパートタイマーとして研究活動を行っていました。彼女は子供が小さいうちは子育てを優先すると決めたので、そのような働き方を選択しました。それでも、実績が認められ、79年から大学の教授の職に就きました。これが日本だったら、パートタイムの人を昇格などさせないでしょうが、アメリカでは彼女の研究業績をみれば、至極当然のことでした。

町田 照子夫人とはよきパートナーとして苦楽を共にされています。先生の著書を拝読すると、誕生日や結



米国 ジョンス・ホプキンス大学の研究室での石坂夫妻。

婚記念日にカードを贈り合っていて、うらやましく思いました。

石坂 アメリカでは夫婦がカードを互いに贈り合うことは日常的でしたから、われわれ夫婦の間でも自然に習慣となりましたね。

■ みんなと同じことをしたがる日本人

町田 先生は免疫学の分野で素晴らしい業績を挙げられ、お若くして文化勲章を受賞されておられます。先生のご専門であるアレルギー、例えば花粉症については、今はどの程度解明されていますか。

石坂 花粉症などのアレルギーがどのような機序で起るのかについてはほぼわかってきました。しかし、アレルギーを発症させないためにはどうしたらよいのかについては、未知の部分が多く、こうすれば花粉症にはかからないという方法は確立されておられません。

町田 花粉症などで悩んでいる方も多く、今後さらにこの分野での研究が必要ではないでしょうか。

石坂 日本に帰ってきて感じたのは、日本では研究の経済性が重視され過ぎているということです。民間企業ならば経済性を重視するのは当然ですが、経済性だけではユニークな研究は生まれません。

ですから、国がもっと基礎研究に力をいれなくてはだめです。しかし、それはそう簡単なことではありません。基礎研究は直ちに経済効果を生み出すものではありませんからどうしても軽視されます。

また日本では、常識的なことや既に流行っているこ

とをやりたいが、人のやらないことをやろうとする人は非常に少ないように思います。一方、アメリカでは他の人がやっていることをやっても意味がないし、研究費も取れません。ですから、なるべく人のやらないことをやろうという雰囲気があります。私が30代に取り組んだ研究は、当時の常識からは外れたことばかりでした。

■ 研究は面白く、美しい

町田 先生が学生時代に、臨床の道ではなく、基礎研究の道へ進もうとされたのは何かきっかけがあったのでしょうか。

石坂 私が卒業したのは終戦後間もなくです。敗戦直後、日本の社会には医者が必要なことが明らかでしたから、最初は臨床医になろうと考えていました。それが基礎研究を目指すことになったのは、学生時代に偶然に訪ねた中村敬三先生との出会いで免疫学に関心を持ったのがきっかけです。

終戦直後は何をやっても保障はありませんでした。そういう時代を生きてくると、怖いものは何もなくなくなります。ですから、本当に自分がやりたい、面白いと思うことをやるために基礎研究の分野に飛び込みました。将来の経済的な保障はないけれど、免疫学の研究を通じてアレルギーと免疫の関係がどのようなメカニズムで起こっているのか、わかっていないことを明らかにしたいと思いました。そしてアメリカに留学しました。

町田 先生は現在も、後輩の研究者の指導や相談など精力的にご活躍されています。そのようなモチベーションはどこからくるのでしょうか。

石坂 それは、「面白いから」そして「美しいから」でしょう。研究して何かが発見されると、それはとても美しいことなので、一生懸命やるのです。



パサノ賞受賞式、パサノ財団理事長夫妻とともに。

論文を読んで「これは実にうまくできているな」と、いつも感動させられます。どういうことかという、新しく分かってきたメカニズムは実は、新しいものではなく、ただこれまで我々が知らなかったことなのです。そして、そのメカニズムはわれわれ科学者が作ったものではなく、自然がつくりだしたもので、その見事な精巧さと巧妙さに感動と感激を覚えるのです。だから研究活動から離れられないのだと思います。お金が儲かるからじゃないですよ、美しいからです。

■ 若い人はチャレンジを

町田 最近、何のために働くのかという類の本が結構売れて、特に若い人たちに好評のようです。昔はとにかく稼ぐこと、食べることで、そのような余裕がなかったのかもしれませんが、今の若い人たちはお金や生活のためだけでなく「なぜ働くのか」というモチベーションを求めているといえるでしょう。

これからの若い世代は、どこかの組織に所属するというような依存心のある職業選択ではなく、自立するための職業人としての選択をしないといけないと学生に言っております。自分は職業人として何を定職とし社会に貢献していくのかが問われるのでしょうか。そのようなことが考えられるように、子供たちの教育をしなければいけません。

石坂 日本人はまだまだ保守的だと思います。「安定した生活のために、とにかくよい学校に入りなさい」と言う親のせいかもしれませんが、そういう考えであれば、生活は安定しても、人の役に立つようなことはできません。みんなが人の役に立つことをしなければ、日本はつぶれてしまいます。

町田 私も最近、自分のためではなくて、人のため、あるいは世のために尽くすと言うことが一番尊いことだと、得心するようになりました。最後に山形のご印象をお願い致します。

石坂 山形の人の穏やかさは非常に優れている部分だと思います。一方で、これまでの慣習や慣例から外れることは非常に難しいという面も強いように感じます。住んでいて安定しているのは非常に結構ですが、逆に思い切って今までと違うことをしようという力は弱いですね。山形にはこれからさらに元気になってほしいと期待しています。

今はどちらかというと、若い人たちはチャレンジすることよりも安全にいけばそれでいいという考えがあるようですね。チャレンジすることは非常にエキサイティングで面白いことです。そのことを若い人にぜひ体験してもらいたいと思います。

町田 本日は貴重なお話をありがとうございました。